仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二-22-七三七一番
編集・発行人　首藤　正義

ありがとう

仙台教区の皆様

前仙台教区長　小林　有方

尊敬すべき仙台教区長佐藤司教様、親愛なる全神父様をはじめ修道者、信徒の皆様!!

去る六月三十日、聖ペトロ・パウロの祭日の佳き日にあわせて、不肖、私の司祭叙階五十周年を盛大に、心をこめて祝って下さいましたことを、心底から、感謝いたします。

思えば、神の不思議なみ摂理により、私の司祭生活五十年の五分の三以上、三十一年を仙台教区に生きることになり、そしてその五十周年の佳き日を、ここ仙台に於て、親愛なる皆様によって祝われることになりました。神が結び合わせて下さった仙台教区と私との不思議な契りの深さを、今、改めてしみじみと味わっております。

それと同時に、誠に浅学非才の私、満44歳で司教に叙せられた私の若気の至りが、皆様の上に与えたであろうさまざまな痛みを思い、慚愧の念に耐えません。

それにもかかわらず、盛大にこの日の祈念に心をこめて参与して下さった皆様の深い愛情とご厚意に胸をしめられる思いで、感謝の言葉もありません。

また、ご祝儀ならびに祝電をお寄せ下さった皆様一人ひとりに親しくお礼の言葉を申し述べるのが本筋ではありましょうが、それも却って意を尽くすことにならぬと思い、ここに「仙台教区報」の一スペースをお借りして、私の心からの感謝の言葉とさせていただきます。

その節、お話し申し上げたように、近く私は仙台教区を離れますが、体は離れても心はいつまでも仙台教区民の一人と信じております。

皆様一人ひとりのご厚意を、主が溢れるばかりに報いて下さることを念じつつ…。

敬愛する兄弟、司祭職を受けてより50周年の祝いを迎えられたペトロ小林有方前仙台司教に対して、多年にわたり教区を導かれた司牧の働きを思い、この幸いなる祝賀の日にあたって祝詞を述べ、且つ、神の豊かな恩寵が注がれるよう、祈ります。

そのあかしとしてここに、心からの使徒的祝福を贈ります。

バチカンにて
一九八五年5月3日
ヨハネ・パウロ二世

司教様の日程

（6月30日現在）

7月7日　宮城県信徒大会（仙台）
8日　教区司祭団役員会（仙台）
10日　人権福祉委員会（東京）
11日　カリタス・ジャパン（東京）
15日　宮城県宗法代表者会議（仙台）
17～18日　カリタス・ジャパン（東京）
21日　石巻教会堅信
22日　盛岡ドミニカン修道院院長選挙
24日　聖ドミニコ宣教女会管区総会（伊丹）
25日　カリタス・ジャパン（東京）
26日　スペルマン病院理事会（仙台）
28日　一本杉教会堅信
29日　教区司祭団月例会
8月1～3日　日本カトリック保育施設協会全国大会（下関）
5日　平和祈願式典（広島）
12日　教区司祭団役員会
8月25～9月2日　ローマ（アド・リミナ）

小林司教司祭叙階50周年
記念式典 盛大に祝わる

去る6月30日、仙台・元寺小路教会において、ペトロ小林有方司教の司祭叙階50周年記念ミサが行なわれた。

当日の式典には仙台教区各県をはじめ、小林司教の出身教会の神戸下山手教会や大阪などから350人が参集して、小林司教の金祝を祝った。

記念ミサは午前9時30分、小林司教、佐藤千敬仙台教区長ほか10人の司祭による共同司式でささげられた。ミサの冒頭、教皇より、小林司教への感謝のメッセージが披露され、小林司教は説教の中で次のように語った。

「こんなにも大勢の人に集まっていただいてうれしい。50年間というものはあっというまにすぎてしまったが、波乱にとんだ人生であった。第二次大戦後、カナダの大学院に留学し、宣教にかかわろうと思っていたやさき、仙台教区長に任命された。第二バチカン公会議に出席し、キリストのからだとして、現代の人々の喜びや悲しみを教会のものとしなければならないことを痛感した。これから私は仙台を離れ、京都にて余生を送ります」

続いて、午前11時30分より仙台白百合学園幼稚園講堂を会場に祝賀会が催され、冒頭、あいさつに立った佐藤司教は、「50年つとめたことはまことにすばらしく、神の目に見えるしるしを見ているようだ。多数の方々がこの喜びをともにしてくださってありがたい。小林司教様、金祝、ほんとうにおめでとうございます」と述べると、会場は盛大な拍手につつまれた。

このあと、仙台教区の信徒を代表して猪岡修一氏（西仙台）が、「神の道ひとすじに50年を生きられたことはほんとうにすばらしい。長年、仙台教区のためにお力を尽くしていただき、ありがとうございました」と祝辞を述べ、続いて記念品贈呈や各県代表による花束贈呈が行なわれ、斎藤石雄司教総代理の乾杯のあいさつがあって会食に入った。

会場にはヤキトリなどの模擬店をはじめ、豪華な食事と、教会音楽の集いの室内楽や、野坂幸子氏のピアノ演奏の披露など、終始にぎやかに金祝を祝い、午後1時閉会した。

後藤寿庵祭を終えて

水沢教会　菊地　栄子

五穀豊穣を願い、胆沢平野開拓の父・後藤寿庵の偉業を偲ぶ寿庵祭が、6月2日午前9時半から水沢市福原で行われました。教皇庁大使ウィリアム・A・カルー大司教様を招いて、県内外から信徒や地元農民など450人が参加し、盛大に祝いました。作物の豊作を願い田畑の祝別と、教皇大使を中心に16人の司祭が捧げるミサ聖祭に心と声を合わせて祈りました。

大司教様の講話では、キリストの大きな愛を知ること。教会を愛し、周囲の人々が教会を知るようにして下さい。そして、勇敢であってほしいと3点を強調されました。キリストに忠実であるためには、多少の苦しみ、犠牲を払わなければならないでしょう。それらは貴重なものであり、人間としての徳を高め、誠実にするからですと結ばれました。ミサの後は親睦会が始まり、アトラクションの踊りを楽しみながら弁当を広げ、和やかな語りあいの場が、あちらこちらに見られました。終ってから寿庵堰めぐりをする人々と感謝の心で別れました。

ミサ中の献金14万円の内10万円はカリタス・ジャパンを通してバングラデシュへ、4万円はフィリピンへ医療品のため送金しました。

カテキスタ会研修会
―岩手地区―

去る6月23日から26日まで、岩手地区カテキスタ会研修会が盛岡で行なわれた。この研修会は、来年の教区大会に向けての準備として行なわれたもので、福島地区からも2人のカテキスタが参加した。

講師のツーゲル師は、「家庭における信仰教育」の具体的なこと、基礎・土台について話された。その中で、子供の信仰教育は大人自身の問題であり、大人がキリスト者としていかに喜びをもって生きているかが問われているとの指摘がなされた。

カテキスタはこの指摘を受けとめ、それぞれの教会で、教区大会を目指して家庭の福音化のため努力することを約して散会した。

日本カトリック看護協会への招き

J・C・N・A仙台支部

カトリック看護協会には、国際カトリック看護協会（I・C・C・N）と日本カトリック看護協会（J・C・N・A）があります。J・C・N・Aは、昭和32年発足し、昭和33年にI・C・C・Nに加入し今日に至っています。

J・C・N・Aとは、日本中のカトリック信者及びカトリックに理解をもつ保健婦・助産婦・看護婦（看護士）・准看護婦、そして看護学生（以上の資格を有する修道女を含む）を会員とするカトリック看護職能団体です。

会の目的―会員の霊的及び専門職業としての知識・技術の向上をはかり、日本中のカトリック看護者が一致団結し相互研鑽と親睦を深め、その職能と環境において神の御国の発展に協力し、愛の実行を推進することです。

本部の事務局を東京の聖母女子短期大学内におき、全国15か所に支部が設けられています。仙台支部はその一つです。

J・C・N・Aの主な活動

・毎年一回、全国大会と研修会（シスター寺本松野氏が中心）の開催

・4年毎に開催される世界大会とアジア大会への参加

・J・C・N・A1年間のテーマにそった各支部の活動

今年度テーマ「看護で示す信仰告白」（黙想会や月例会により日常の看護、出来事を通してキリストの愛について分かちあう。教会行事への参加、協力、等々）

・今年度全国大会

大阪にて、8月30日～31日

テーマ「キリストのぬくもりを伝える看護」

・今年度研修会

岡山にて、11月16日～17日

「宗教と生命観」の予定

※J・C・N・Aに興味をもたれた方、情報を知りたい方は左記に御連絡下さい。

〒九八三　仙台市東仙台六―七―一

光ケ丘スペルマン病院

仙台支部長・工藤　静子

TEL0222―57―0231（代表）

ある雨の日に

私は昔から、小さなことやくだらないことにこだわる子供で、一時この悪癖はなおったものの、仙台に来て2か月ほどたった今、再びこの癖が出だした。私は現在、某教会の中学生会のリーダーをやっているが、このほど中学生の親を対象とした「父兄会」なる催しを行なうことになり、毎年この名称で行なっているそうだが、私としては、「父兄」という言葉が気に食わないのである。この言葉は読んで字の如く父と兄であり、儒教思想からくる戦前の家父長制度の名残以外の何ものでもない。実際この「父兄会」に来るのは、たまに父親も来るかもしれないがほとんど母親だし、まして兄など何の関係もないのだから、「保護者」か、せめて「父母」ぐらいが適当ではないか、と他のリーダーにもちかけたところ、そんなこと今まで気にしてなかったし、だいいち、「父兄会」でないと親の方がピンとこない、と言われた。

これから仙台で4年間、私は意地を張って重箱の隅をつつき通すのだろうか、それとも霧雨に打たれて一東北人と化してしまうのだろうか。楽しみである。

（荒賀　久仁夫）

御礼と御報告

カトリック正義と平和
仙台協議会

去る5月1日付にて教区内全教会にお願い致しておりました「外国人登録法の改正を求める要請書」の署名運動に対しまして、本当に沢山の方々から御協力頂きました。どうも有難うございました。署名者数とカンパとして寄せられた金額は、仙台でまとめた分で、一、七二九名、三万四千円に上りました。このほかにも、直接中央協議会に送られた署名やカンパもあると思いますが、教区報紙上をお借りして御礼とご報告申し上げます。

間もなく平和旬間がやってきますが、今後もますます正義と平和を求めて祈り、学び、活動して参りたいと思います。

仙台協議会　会長　猪岡　近男
指導司祭　平賀　徹夫

小林司教 金祝ミサ説教(1)

五十年を振り返って

五十年の重み

皆さん、私がここに立って、皆さんにお話致しますのは何年ぶりでしょうか。10年近い年月がたっていったように思います。今日久しぶりにこの壇上に立つことになりました。

わたしの司祭叙階50周年というこの日を、共に祝って、大勢の方々がこうして集まって下さったということ、そして、懐かしい皆さんの顔を見ながら、ここに立つのは、おそらくこれが最後だろうと思いますので、一言お話し申し上げることは本当にうれしいことです。

今日は、聖ペトロ・パウロの大祝日ですが、そのことはしばらくわきにおいて、折角私の金祝を祝うために集まって下さった皆様に、簡単ではありますが、この50年間の思い出を少しお話し申し上げてみたいと思います。

50年というと、昔の人は、「人生わずか50年、70古来まれなり」と申しました。そういう人々の目から見ると、50年というのはまさに人の全人生であっただろうと思います。

思えば、この50年という年月は、私にとって夢のようにあっという間に過ぎ去っていった気が致します。殊に、私がこの50年をなんと短いあわただしい年月であったかと思うのは、この50年という年月が、誠に様々な波乱に富んだう余曲折の50年であったからです。

50年というと、皆様の中にはまだ生まれていなかった方が沢山いらっしゃるでしょうし、この50年間に起こった、殊に教会の中に起こってきた様々な出来事について、ご記憶の方はあまり多くないことと思います。

教会の責任 日本人に移行

私が司祭に叙階されたのは、昭和10年でした。お年寄りの方はご存じと思いますが、昭和11年には、あの二・二六事件をはじめとして、軍国主義・ナショナリズム・国粋主義が日本の空を覆い始めていたのです。

私が司祭になって間もなく、そう、四、五年にならない間に、その当時は、日本の教会のほとんど全部が、外国の宣教会の手によって治められ導かれておりました。キリスト教というと、外国の勢力と結びついているという、そういう疑惑をもたれていたのです。

そこで、日本のカトリック教会が、外国の勢力によって導かれているということが、カトリックの教会にとって、決してよいことではないとお思いになった当時の教皇使節マレラ大司教様の英断によって、当時日本を治めておられた各教区の教区長は一斉に身をひかれ、代って日本人が一挙に全教区の教区長となったのです。

もちろんその前に、長崎の司教様は仙台出身の早坂司教様でしたし、土井大司教様もその何年か前に、日本人として東京の大司教になっておられました。それ以外は全部外国人でした。その外国人の宣教師・修道会によって治められていた教会は、その時から一斉に日本人の教区長が執って代わることになったのです。

宣教師受難時代

それが確かによかったことだと思えたのは昭和16年に大東亜戦争がぼっ発した時でした。敵性国家として見られていたアメリカ・カナダ・オランダ・イギリスといった国々の宣教師の方々は、一斉に収容所に入れられて、数少ない日本人の司祭たちが、数個の小教区を兼任しながら、細々と教会の命を保っているという時代でした。

戦争中は布教や宣教の時代ではありませんでした。何とかして教会を残そうと懸命でした。しかも力の限りの仕事がわずかな日本人の司祭によって続けられていた時代だったのです。

私も軍に徴用され、オランダが治めておりました南方のインドシナの現地人の宣教司牧として派遣されました。そして2年ばかりの滞在のあと終戦を迎え、日本に帰ってきて、大阪に落ち着きました。（つづく）

ブラジルを訪ねて(6)　☓☓☓☓

東仙台　長井　和子

『３歳になる一人の子供が麦畑の中で迷子になった。両親は恐怖にかられてあちこち捜し回り、近所の人も協力して子供の行きそうな方向を見回った。その日も暮れ、朝になったが子供は見つからなかった。突然一人が、素晴らしいことを思いついた。「なぜ私たちは手をつないで皆一緒に麦畑に入らないのだろう」この思いつきに皆賛成し、互いに手をつないで、とてつもない広い畑に入り、くまなく捜した結果、ついに子供を見つけた。しかし子供は死んでいた。父親は泣きじゃくりながら、「なぜ最初の日から手をつないで捜さなかったのだろう」と悔いるばかりだった。』

ブラジルの基礎共同体の集会では、どこでもこの話が語られ、共同体の一致（愛）の働き自分がそこからはずれていないかの反省がなされる。教会基礎共同体の試みは一九六〇年ごろ、リオ・グランデ・ド・ノルテ州ナタール大司教区のニジア・フロレスタに始まったといわれるが、この教会の新しいあり方はすばやく全ブラジルに広がった。基礎共同体は人々が教会（イグレジア）として生きるところであり、貧しい人々自身による貧者の解放が追求されていくところである。人々の意識を変え、現実の社会を見極め、生活の出来事をみことばに照らされて見つめ、一致して働く愛の集いである。

私は幸いにもこの基礎共同体が最もよく働いているマンダグワスの共同体で数週間を共に過ごすことが出来た。ここは昔、ブラジルで一番よいコーヒーの産地として栄えたところであるが、今は昔日の面影をわずかに残す田舎の小さな共同体であるが、その根っこから湧き出てくる力強いエネルギーを感じさせるところでもある。共同体は街を区画により26等分し、周辺の部落を一単位として70の基礎共同体から構成され、セントロから遠くになるに従って貧しさ、むずかしい問題をかかえてはいる。各基礎共同体では、すべての住人のリストが一目瞭然と整理され、日本のように一人暮らしの老人が死後一週間目に発見というような事は決してない。すべての人は自分の役割の参加がある。

私はビンセンシオ会に入り、彼らと共に家のない人の為の家の建築、古い家のペンキの塗り替え、引越の手伝いをした。共同体の全員が集い、アラバレ、アラバレ、と主をたたえ、祝別と喜びの集いが夜更けまで続いた。

彼らと働き、話しているうちに、彼らにとって解放とは、神学である前にまず信仰を全人間の解放として戦い生きていく。その働きのなかに神の愛をしっかり受けとめ、愛といつくしみだけが人間を解放させる力であることを、実際具体的に体験しながら生きている共同体の連帯の美しさ、これが南米の教会の根っこのすみずみで生きていることを感じる。特にそれが神学など、ほとんど縁のない人々のなかで生起するのであるから、そこに神の深い神秘を味わうのである。

☓☓☓☓☓☓☓☓☓☓☓☓☓☓

＊神学院報告(2)　元寺小路出身ヨハネ会津

不可思議な世界＊

皆さん、お元気ですか。梅雨のうっとおしさが小休止した今日、晩になってくると、妙に夏が感じられます。遠くに聞こえる花火の音、どこからともなく漂ってくる蚊とり線香の香り：：夏期学校の様々な思い出が甦ってくるようです。

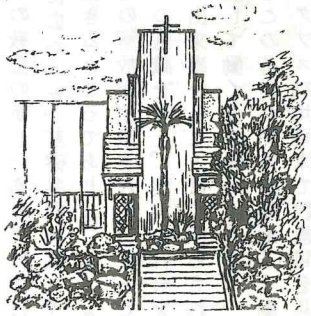
しかし夏休みを目前にした今、そのような思いに耽っていることはできません。夏休み直前に期末試験があるからです。この時期の神学院は様々な人間模様が描き出されて、本当に不思議な世界になってきます。60名余りの血気さかんな男ばかりが共同生活を営んでいること自体、不思議といえば不思議なのですが、司祭召命に応えてゆこうとする個性の強い人間が60名余りも集まると、楽しいというか、呆れるというか、不可思議な共同体となってゆきます。しかもその共同体の一人ひとりが、休みになれば自分の教区に戻れるという期待と、その前に試験があるという厳然とした事実との間にあって、曰く言い難い緊張状態に陥り、その結果、各自の個性が燦然と輝き渡り、全体として、不可思議な世界にますます磨きがかけられるのです。

しかし、このような面が見え隠れしながらも、外面的には相変らずいつもの生活が続いています。本当に不可思議な世界でありながら、まったく当り前の世界。こうして今日も暮れ、再び新しい一日がミサと共に始まるのです。

おらが教会

(53)

宮城・西仙台教会



西仙台教会は仙台駅から西へ約5キロ、国宝で名高い大崎八幡の近く、市の西北に広がる住宅地に至る交通の要路に位置を占める。

主任司祭の深沢守三神父様は、広瀬川原大橋下の殉教碑を制作された彫刻家である。聖堂入口にはこの殉教者群像の原型像が、祭壇には神父様作の聖母子像が、訪れる人を見守る。司祭館にも作品の数々が並び、ミニ美術館の趣きを呈している。

信者数は二百名余り、約50家族のほか、学生の信者・求道者も多い。近くに東北大学国際交流会館があり、スペイン、フィリピン、韓国などの研究者、留学生、その家族も主日のミサに与り、国際色豊かである。信徒会長は国立仙台病院名誉院長で外科医の菊地金男先生。昨秋勲一等の叙勲を受けられ、早速祝賀会を開き教会あげてお祝いした。

教会が現在地に建てられたのは一九七七年（昭和41年）、その前は角五郎丁又は北五十人町教会といって、現在養護施設仙台天使園のある地にあった。歴史は古く、一九〇七年（明治40年）、当時の函館教区長ベルリオーズ司教が教区神学校を角五郎丁に移し、男子寮を設け、信者の増加に伴い、一九〇九年（明治42年）に教会を創設したという。白い小さな聖堂で、内部は荘厳な木彫の祭壇、正面、側面の高い窓には守護者聖ヨゼフ、聖ミカエル、その他の聖人のステンドグラスがはめ込まれ、自ら畏敬の念の湧く美しいお聖堂であった。日本最初の枢機卿故土井大司教様が神学生時代、この角五郎丁教会に所属しておられたと聞く。一九三一年（昭和6年）聖ドミニコ会女子修道院が、2年後には仙台天使園が隣接地に創設され、以来教会と一体となって、さまざまな信心業が行われた。

終戦後多くの、特に若い人が魂のより所を求めて教会に来た。また、当時ラ・サール会が信者の山田様宅に仮寓して日曜学校に力を入れたこともあって、大勢の子供達が集まった。日・祝日のミサは聖堂超満員の賑わい。なのに一般信者数は微々たるもので、教会活動は青年会、姉妹会が中心となった。その中に若き日の佐藤千敬司教様がおられたのである。司教様は青年会長として主任司祭渡辺吉徳神父様の片腕となって働かれた。教会の機関紙「ほしかげ」は、当時司教様が執筆、編集、ガリ版印刷を一手に引受けて創刊されたものである。当初はザラ紙一枚程度が、いまではページ数も大幅に増え、内容もバラエティーに富み、堂々たるものである。40年近く続く機関紙などザラにはないのではなかろうか。

御降誕前夜の聖劇、被昇天祭の提灯行列、ロザリオ月の信心、家庭集会など、その頃の心に残る行事は多いが、何につけても全員一致協力して、家族的な雰囲気が特徴だった。よく会食を催し、メニューはきまって姉妹会特製のちらし寿し。大好評だった。この姉妹から聖ドミニコ会その他の修道会のシスターになられた方も少なくない。

時は移り、教会の場所も、名称も、人も変り、信者数は増え、内部の組織体制が確立した。信徒会の下に壮年会、婦人会、青年会その他、各役割を分担し、独自の活動を展開しながら、主任司祭を中心に、代表の教会委員会によって教会活動は整然と運営されている。典礼行事は勿論、教理、聖書研究会、教会学校、ボーイスカウト、遠足、夏期合宿、バザー、老人ホーム奉仕、難民救済運動等々、多彩な活動によき伝統は生かされ、家族的つながりは固い。中でも恒例のバザーには全員総力を結集し、近隣にも呼びかけ、毎年大盛況、模擬店にはなつかしのちらし寿しもあり、総計ン十万円の収益をあげ、有効に活用されている。

家庭集会も復活し、最近は御ミサ後、婦人会のお茶やコーヒーのサービスで親睦は一層深まっている。佐藤司教様に続く笹気直哉神父様が活躍中、シスターになる方もおられる。教会の限りない発展をめざし、一同精一杯頑張っている。乞御声援。（宇津木　えつ子）

【編集後記】司祭生活50年、それは教会の歴史の半世紀でもある。小林司教様に、心から感謝の言葉を捧げたい。「ご苦労さまでした。ありがとうございました。」（首）